東京日々新聞

七百八號

越後の國新潟の藝妓又今川屋雛と言る者

雛の美あらとく世容姿あり面色

山々亭有種

樣のごとく艶ありねど弦を採て客と浮ゝもの妙あるい其繁昌殆と三味線の彈もさらぬ是ふ於て畜財千四ふ及べり然るふ雛ふ情郎ありて名を敦賀屋喜右エ門と呼び廿年來馴親〳〵既ふ二女を生〳〵長女い等〳〵藝妓さりはじも漆膠の中ゝり共金い敵の世ありさん敦喜一朝米相場の失策ふり千有餘四の損とり夫を償ん為め窃ふらの畜財を持出〳〵ると雛い夢ふざふちらぬ久し〳〵間淳陀金の開帳とふさぶと箪笥の引出〳〵を明さはふ光明何ぞへ五光りを放ちて影ざふ止めぬ足必ず敦喜の所為ふらんと是を公ふ訴へんとせ〳〵ど止る若ありて其事ふ至らざれども遂ふい為ふ病ひとあり又幾許ふ日にして快氣ふ至はとるり

蕙齋芳幾

甲貝屋
浅草駒栄